

『英文熟語集』の現代性

裕 本 トモミ

注

本稿は、神奈川大学大学院 佐野正巳教授指導による日本語・日本文化研究の前期レポートとして提出したものを、調査範囲を拡げ、加筆訂正したものである。

1. はじめに

杉田玄白らは、『解体新書』を翻訳する際、ある単語が眉を意味すると解するまでに数日を要したという。あまたの辞書があふれる現在でさえ翻訳といえば大事業である。しかし、そういった手助けになるものがほとんどない状態で、訳の分からぬ文字（というよりは記号）の羅列を解釈していくという作業はまさに“暗中模索”であったろう。

私は『英文熟語集』^(註1)を初めて手にした時、そんなことを考えていた。

いったいどのようにしてこのような辞書を編纂したのであろうか。この辞書の訳語は現在でも通用するのだろうか。そんな疑問から、手持ちの辞書を取り出した。見た目からして時の流れを感じた。『英文熟語集』ははかない程の重さの和紙・和装の左袋綴本で、128年の年月を思わせる風貌である。一方私が取り出したのは、その名も IC Dictionary^(註2)、スペルにしたがってアルファベットのキーを打ち、「訳」ボタンをおせば訳語がでる、という代物であ

る。

しかし、外見のギャップに反してそれぞれの訳語は共通するものも多く、反対に記載されていないものもあり、しばしのあいだ私はその辞書遊びに夢中になった。それがこのテーマの発端である。

2. 『英文熟語集』について

本書は慶応4年(1868年)3月、小幡篤次郎・小幡甚三郎兄弟により尚古堂から出版された。同兄弟の略歴を竹中龍範「『英文熟語集』解題」より転載する。彼らは元治元年(1864年)同郷の福沢諭吉により中津(現在の大分県)から呼び寄せられ福沢塾にて英学研究に励み、兄篤次郎は慶応2年に塾頭を任ぜられたほどであった。本書の出版が、彼らが英学研究を志してから4年目であったことからいかに彼らが向学であったか推察できよう。出版の動機については、竹中龍範「『英文熟語集』解題」より引用する。

…すなわち、英書を読むものが困難を覚える「前詞付キノ動辞」(前置詞付きの動詞、すなわち句動詞(phrasal verb)のこと)や「組立ノ副辞」(副詞句のこと)などを、読書の折々に集めておいたものが少しばかりたまっているので、Websterの辞書、華英辞典[『解題』では恐らくLobscheidのものであろうとしている]に拠って補訂し、出版したということである。

ここに挙げられている Webster の辞書というのは、アメリカの辞書の父といわれる Noah Webster (1758-1843) により 1828 年に初版が出版された、“An American Dictionary of the English Language” であると推察できる。これは A 5 判、約 1000 ページの辞書であり、各熟語の解説と『英文熟語集』の熟語とが多く一致していることから以上のように考えられる。アメリカに渡った通訳の中浜万次郎と福沢が日本に持ち帰ったのが最初だといわれる。華英辞典については、宣教師 W. Lobscheid により 1866 年香港で出版され、日本の英学者に大いに利用された。

また竹中は、本書は単に「熟語集」というレベルにとどまらず、辞書的性格を十分に備えており、書名を『英文熟語辞書』としてもよかったくらいである、とさえ述べている。これらのことから本書の完成度の高さがうかがえる。

3. 『英文熟語集』の現代性

一 慶応4年の辞書は平成の今日でも使えるか

本章では、『英文熟語集』と現代の熟語集とを比較する。現在書店には、大学受験対策、実用英語検定対策、TOEFL/TOEIC 対策など多くの熟語集が並べられているが、日本独自の英語検定であり、英米語の現代語を反映しているという点から実用英語検定用の熟語集を選択する。

この検定は5級から4級、3級、準2級、2級、準1級、1級と、かなりレベルの幅が広い。各級にあわせて問題集が出版されているが、4級以下は熟語を必要とするレベルではなく、したがって掲載されていないので、ここでは3級、2級、1級の熟語集を用いて比較し、同じ訳語で記載されているもの及び大きく意味の異なるものを挙げる。本来は全項目について調査すべきであるが、アルファベット順にAからNまでの14項目について各単語集で調査を行った。なお、『英文熟語集』では、動詞はtoをつけて不定詞形で表されている。訳語についてはいくつか解説不可能なものもあるため、代表的なものを挙げた。旧字体の漢字については、読みやすさを考慮して現在使われている漢字に改めたものもある。

(1) “A”

『英文熟語集』におけるAの項目は見出し語46語、熟語数139が掲載されている。そのうち各英検単語集と重複するのは以下10語であった。

『英文熟語集』	英検用熟語集	
① to be able : 得ル, 能ス	3 級	be able to : ~できる
② to account for : 弁説スル, 説キ明ス	2 級	account for : ~を説明する

③ in advance : 表ニ, 前ニ, 前以テ	2 級	in advance : あらかじめ, 前以て
④ to aim at : 狙ウ, 傾ク, 勉メル	2 級	aim at : ~をねらう
⑤ to let alone : 其儘置ク	2 級	let alone : ~はいうまでもなく
⑥ as far as : 其丈ケ	2 級	as far as : ~に関する限り
⑦ as far/as to : ニ付テハ	2 級	as far/as to : ~についていえば
⑧ as soon as : スルヤイナヤ	3 級	as soon as : ~するとすぐに
⑨ at intervals : 間ヲオイテ	2 級	at intervals : ときどき, ところどころ
⑩ at least : 少クトモ	2 級	at least : 少なくとも~

そのうち意味が異なるのは⑤, ⑥の2つで, そのほかはほぼ同じ意味の訳語があたえられていた。

(2) “B”

Bの項目は見出し語69, 熟語数は232である。そのうち英検用熟語集と重複するのは以下8語であった。

『英文熟語集』		英検用熟語集
① to back up : 支持スル, 助ケル	2 級	back up : ~を支える, 後援する
② to make the best of : 極メテ改正スル, 心ヲ尽シテ	2 級	make the best of : ~を大いに利用する, できるだけ利用する
③ to break ground : 地ヲ掘ル	1 級	break ground : 起工する, 事業を始める
④ to break out : 破ッテ出ス	2 級	break out : 起こる, 始まる
⑤ by chance : 偶然ニ	2 級	by chance : 偶然に
⑥ to stand by : 助ケル	2 級	stand by : ~を支持する, 助ける
⑦ by far : トテモ	2 級	by far : ずっと, はるかに
⑧ by degree : 漸次ニ	2 級	by degree : しだいに

うち, 異なる訳語が与えられていたのは②, ③, ④であった。

(3) “C”

Cの項目は見出し語94, 熟語数は222であった。そのうち英検用熟語集と重複していたのは以下8語であった。

『英文熟語集』		英検用熟語集
① to call for : 望ム, 要スル	2 級	call for : ~を必要とする
② to call off : 脱ケル	2 級	call off : ~を取り消す
③ to carry on : 崇メル, 進メル	2 級	carry on : ~し続ける, ~を続ける

④ to carry out : 刑ニ置ク, 支持スル	2 級	carry out : ~を実行する
⑤ to come home : 切迫スル, 情ニ感スル	1 級	come home to : ~の胸にこたえる ^(注3)
⑥ to come out : 公ニナル, 顕レル, 終ル	3 級	come out : 出る
⑦ on the contrary : 返シテ, 向側ニ	2 級	on the contrary : それどころか
⑧ to the contrary : 真裏ニ	2 級	to the contrary : それと反対に

このうち、異なる訳語を与えられていたのは②、③、④、⑦、⑧の5語であった。

(4) “D”

Dの項目は見出し語50, 熟語数は107であった。そのうち英検用各熟語集と重複していたのは以下1語であった。

『英文熟語集』		英検用熟語集
① to do one's best, one's diligence : カヲ尽シテ	3 級	do one's best : 最善を尽くす

表現はことなるがほぼ同義であることが観察される。

(5) “E”

Eの項目は見出し語27, 熟語数は50であった。そのうち英検用各熟語集と重複して掲載されていたのは以下2語である。

『英文熟語集』		英検用熟語集
① to enjoy one's self : 満足する	3 級	enjoy oneself ^(注4) : 楽しく過ごす
② every now and then : 度々, 些トノ間ヲオイテ	2 級	every now and then : ときどき

うち、異なる訳語を与えられていたのは①のみであった。

(6) “F”

Fの項目は見出し語41, 熟語数は113であった。そのうち英検用熟語集と重複していたのは以下3語であった。

『英文熟語集』		英検用熟語集
① to figure out : 算用シテ高ヲ見出ス	2 級	figure out : ~が分かる, 理解する
② to find fault with : 罪スル, 非難スル	2 級	find fault with : ~の欠点をさがす
③ to flare up ^(註5) : 不意ニ熱クナル, 発情スル	1 級	flare up : 怒りをぶちまける, 突然起こる

上記3語とも英検用熟語集とは意味の掛け離れた訳語があたえられていることがわかる。

(7) “G”

Gの項目は見出し語14, 熟語数87であった。うち, 英検用熟語集と重複して掲載されていたのは以下11語であった。

『英文熟語集』		英検用熟語集
① to get in : 入込ム	3 級	get in : 乗り込む
② to get off : 取除ケル, ノガレル	3 級	get off : 降りる
③ to get on : 進ム	3 級	get on : 乗り込む
④ to get to : 至ル, 届ク	3 級	get to : ~に着く, 到着する
⑤ to give up : 棄テル, 公ニスル	3 級	give up : やめる, あきらめる
⑥ to go by : 等閑ニスル	3 級	go by : 通りすぎる, 経過する
⑦ to go down : 吞込テ居ル, 引受テイル	3 級	go down : 降りる
⑧ to go out : 消ユル, 公ニユル	3 級	go out : 外出する
⑨ to grow up : 生長スル	3 級	grow up : 成長する, 大人になる
⑩ to give off : 止メル, 禁スル	2 級	give off : (熱・臭いなどを)発する
⑪ to go through : 仕遂ケル, 終ル	2 級	go through : 経験する

このうち, 異なった訳語を与えられていたのは, ①②③⑤⑥⑦⑧⑩⑪の9語であった。

(8) “H”

Hの項目は見出し語25, 熟語数141であった。そのうち両者に共通して掲載されていたのは以下1語であった。

『英文熟語集』		英検用熟語集
① to have on : 着ケル	3 級	have on : (衣服を)着ている

両語とも「衣服を身につけている」という同一の状態を表していることから

同義語として扱う。

(9) “I”

Iの項目は見出し語13, 熟語数28である。そのうち英検用熟語集と重複していたのは以下1語のみであった。

『英文熟語集』		英検用熟語集
① in order to : …ノ為ニ	2 級	in order to : ~するために

(10) “J” (11) “K”

Jの項目は見出し語12, 熟語数17で, Kの項目は見出し語8, 熟語数は42であるが, 英検用熟語集と重複する熟語は発見されなかった。

(12) “L”

Lの項目は見出し語38, 熟語数は167であった。そのうち英検用各熟語集と重複して掲載されていたのは以下5語であった。

『英文熟語集』		英検用熟語集
① to look for : 捜ス, 待テ居ル	3 級	look for : 探す
② to look up : 見上ゲル	3 級	look up : 辞書を引く, 調べる
③ to lay aside : 離ス, 捨置ク	2 級	lay aside : ~を取っておく, ~を捨てる, あきらめる
④ to leave out : 廃スル, 忘レル	2 級	leave out : ~を省く
⑤ to let alone : 構ハズニ捨置ク, 見放ス	2 級	let alone : ~は言うまでもなく

うち, 異なる訳語が与えられていたのは, ②④⑤の3語であった。

(13) “M”

Mの項目は見出し語22, 熟語数は97であった。そのうち英検用各熟語集と重複していたのは以下5語であった。

『英文熟語集』		英検用熟語集
① to make no difference : 事トモセス, 意ヲ留メス	3 級	make no difference : 同じことである
② to make up one's mind : 決定スル	3 級	make up one's mind : 決心する

③ to make believe : …カト思フ	2 級	make believe : ~のふりをする
④ to make light of : 何トモ思ハヌ	2 級	make light of : ~を軽んじる
⑤ to make much of : 珍重スル	2 級	make much of : ~を重んじる

うち、異なる訳語が与えられていたのは、①③の2語であった。

(14) “N”

Nの項目は見出し語22、熟語数は97であった。そのうち、英検用各熟語集と共通して掲載されていたのは以下1語であった。

『英文熟語集』		英検用熟語集
① now and then : 折々, 間ヲ置テ	2 級	now and then : ときどき

以上の結果を表に表してみる。

	『英文』掲載語数	共通掲載語数	同義掲載語数	異義掲載語数
A	139	10	8	2
B	232	8	5	3
C	222	8	3	5
D	107	1	1	0
E	50	2	1	1
F	113	3	0	3
G	87	11	2	9
H	141	1	1	0
I	28	1	1	0
J	17	0	0	0
K	42	0	0	0
L	167	5	3	2
M	97	5	3	2

N	31	1	1	0
計	1473	56	29	27

各級の内訳については以下のとおりである。

	1 級	2 級	3 級	計
共通掲載語	3	34	19	56
同義掲載語	1	19	9	29
異義掲載語	2	15	10	27

まず第一の印象としては、共通して掲載されている熟語数が予想よりもはるかに少なかった。辞書で引いてみると共通掲載語数はかなりの数にのぼるが、やはり英語検定対策用として数が絞り込まれていること、そして『英文熟語集』には熟語というより連語というほうが適当なものが多く、したがって熟語集には掲載されない、という2つの理由が考えられる。

各級の比率については、2級が34と抜きん出ている。3級が19、1級が3とこれらは少ないが、3級についてはそもそも熟語の出題数が少ないためであると思われる（書店では3級対策熟語集というのは見当たらず、すべて単語集と併用であった）。1級については、どの熟語も文化的色合いが強く、単語の意味を大きく離れた、比喩的・慣用句的表現がほとんどであった。これらの点からみると、日常的に頻繁に用いられる熟語が多く掲載されている2級に共通掲載語が多いことから『英文熟語集』の実用性の質の高さがうかがえる。

4. 異義掲載語の検証

本章では、以上の調査により共通して掲載されていた熟語のうち、異なっ

た訳語が与えられていた熟語を, “An American Dictionary of the English Language” (N. Webster, 1891, Donohue & Henneberry Publishers) 及び『カレッジライトハウス英和辞典』(竹林 滋・小島 義郎・東 信行 編, 1995, 研究社) で検証する。“An American Dictionary of the English Language” は本書編纂の際参考にされた辞書であることが選択の理由であるが, おそらく利用されたと考えられる初版(1828年)及び第2版(1840年/1847年)は入手できず, 1891年のものを用いた。「カレッジライトハウス英和辞典」は連語が多く収録されており, また1995年の出版であることから現代性が高いと判断して利用した。

“W” は Webster による “An American Dictionary of the English Language” の訳語を, 「ラ」は「カレッジライトハウス英和辞典」の訳語であることをそれぞれ示す。また(文)は『英文熟語集』の訳語を, (検)は実用英語検定用の各熟語集の訳語を示す。

(1) “A”

⑤ to let alone : (文) 其儘置ク/(検) ~はいうまでもなく

“W” to leave

「ラ」<接>ましてや~でない, ~はいうまでもなく

<動>~をかまわないでおく

上記より, (文)では動詞としての訳語を, (検)では接続詞としての訳語を掲載していることがわかる。

⑥ as far as : (文) 其丈ケ/(検) ~に関する限り

“W” 掲載なし

「ラ」<前>~まで(も), ~ほど遠くまで, ~と同じ距離だけ,
~するところ(程度)までは

<接>~の限りでは, ~だけ

上記より, (文)では前置詞としての訳語を, (検)では接続詞としての訳語を掲載していることがわかる

(2) “B”

② to make the best of : (文)極メテ改正スル, 心ヲ尽シテ

(検) ~を大いに利用する, できるだけ利用する

“W” 掲載なし

「ラ」~を最大限に利用する, ~を何とかしのぐ, 我慢してやっていく

(文)の訳語と現在の訳語との間には相当な意味の隔たりが感じられる。
当時は(文)のような意味で用いられていたのであろうか。

③ to break ground : (文)地ヲ掘ル/(検)起工する, 事業を始める

“W” to plow ; to dig ; to open trenches ; to
commence an undertaking

「ラ」掲載なし

“W”に(文)・(検)それぞれの訳語が掲載されているが,(文)の訳語は直訳であり, 比較すると(検)の意味のほうが派生義であると考えられる。

④ to break out : (文)破ッテ出ス/(検)起こる, 始まる

“W” to discover itself by its effects; to arise or spring
up

「ラ」起こる, 突発(発生・流行)する, (ふきでものが)突然
出る

(文)の訳語は他動詞的であり, 一方(検)の訳語は自動詞的であることが観察されるが, これらの訳語だけから元の句の意味を明確にすることは難しく思われる。この点については, さらなる調査が必要であろう。

(3) “C”

② to call off : (文)脱ケル/(検) ~を取り消す

“W” to summon away ; to divert

「ラ」取り消す, 取りやめる, 中止させる, (犬などを)呼んで
おとなしくさせる/他人に吠えつくのをやめさせる,
(兵士に)攻撃をやめさせる, (名を)読み上げる

(文)は“W”・「ラ」共に関連性が認められない。編纂上の誤りであろうか。

- ③ to carry on : (文)崇メル, 進メル/(検)～し続ける, ～を続ける

“W” to promote ; advance, or help forward ; to continue

「ラ」続ける, さわぎたてる

- ④ to carry out : (文)刑ニ置ク, 支持スル/(検)～を実行する

“W” to bear from within ; to sustain to the end ; to continue to the end

「ラ」実行する, 行う, 運び出す

③④については, 筆者の考察では, (文)と(検)・“W”・「ラ」の間にあまり関連性がないように思われる。これについても, 実際に(文)の意味で使われていたのか引き続き調査を行いたい。

- ⑦ on the contrary : (文)返シテ, 向側ニ/(検)それどころか

“W” in opposition ; on the other side

「ラ」とんでもない, それどころか, 全く反対で

(文)は「返シテ・向側ニ」と実際の場所を示しているが, これを比喩的に抽象化したのが(検)だと考えられるのではなかろうか。

- ⑧ to the contrary : (文)真裏ニ/(検)それと反対に

“W” to an opposite purpose or fact

「ラ」それと反対に(の)

⑦と同様に(文)の「真裏ニ」という訳を“(物事の)真裏”つまり“反対”を意味すると解釈すれば同義であるといえる。

- (4) “D”

異義掲載語なし

- (5) “E”

① to enjoy one's self : (文)満足スル/(検)楽しく過ごす

“W” To enjoy one's self, is to feel pleasure or satisfaction in one's own mind, or to relish the pleasure in which one partakes ; to be happy

「ラ」愉快に過ごす, 楽しい思いをする

“W” には (文)・(検)両方の訳語が見られる。

(6) “F”

① to figure out : (文)算用シテ高ヲ見出ス

(検)～がわかる, 理解する

“W” 掲載なし

「ラ」～を理解する, ～を計算して(合計を)出す

「ラ」には(文)・(検)両方の訳語がみられる。現在は主に(検)の意味で用いられているようだが, (文)の訳語も第二の意味として掲載されていた。

② to find fault with : (文)罪スル・非難スル/(検)～の欠点をさがす

“W” to blame ; to censure

「ラ」掲載なし

「ラ」に掲載がなかったため IC Dictionary^(註2)をひいてみると, “～のあらをさがす, ～を非難する, とがめる”と掲載されていた。このことから, 両者とも現代語訳として通用することがわかるが, “W”を見ると, 当時は(文)の意味あいが強かったようである。

③ to flare up : (文)不意ニ熱クナル, 発情スル

(検)怒りをぶちまける, 突然起こる

“W” 掲載なし

「ラ」燃え上がる, かと怒る, (暴動などが)勃発する, 激しさを増す

厳密にいえば異義ということになるが, 両者とも“感情が激高する”という状態を表しているという点では共通するものがある。

(7) “G”

① to get in : (文) 入込ム/(検) 乗り込む

“W” to collect and shelter ; to bring under cover

「ラ」(自) 中に入る, 乗る, 到着する

(他) ~を中にいれる, (車などに) 乗せる, ~に乗る

(文) と “W” の間に共通性は認められないが「ラ」には(文)・(検) 共に同義の訳語が見られる。ここから考えると, (文) は “W” よりも現代性が高いと言えるかもしれない。

② to get off : (文) 取除ケル, ノガレル/(検) 降りる

“W” to put off ; to take or pull off

「ラ」降りる, 出発する, (軽い刑罰, けがなどで) 逃れる, 免れる

当時は主に(文)の意味合いが強かったようであることが観察されるが, 現在は主に“降りる”という意味で用いられることが多いようである。しかしながら(文)の訳語が死語となってしまったわけではなく, 現代の辞書にも同義の記述が見られる。

③ to get on : (文) 進ム/(検) 乗り込む

“W” to put on, to draw or pull on

「ラ」乗る, 暮らしていく, やっていく, 進む, はかどる

(文)・(検) 両者の訳語とも「ラ」に記述されている。

⑤ to give up : (文) 棄テル, 公ニスル/(検) やめる, あきらめる

“W” to resign ; to quit ; to yield as hopeless

「ラ」やめる, 断念する, あきらめる, 見放す

(検) は(文) の “棄テル” を “放棄する” と解釈し, そこから派生したと考えられるのではなかろうか。

⑥ to go by : (文) 等閑ニスル/(検) 通り過ぎる, 経過する

“W” to pass near and beyond

「ラ」通り過ぎる, (年月が) たつ, (機会, 過失などが) 見逃される

“W” には(検)と同義の訳語しか見られないが、「ラ」には(文)・(検)ともに記述がある。

- ⑦ to go down : (文) 吞込テ居ル, 引受テ居ル/(検) 降りる

“W” to descend in any manner

「ラ」下がる, 低くなる, 沈む, 降りる

(文)は(検)・“W”・「ラ」ともに関連性が認められない。

- ⑧ to go out : (文) 消ユル, 公ニユル/(検) 外出する

“W” to issue forth ; to depart from

「ラ」出て行く, 外出する, (火などが)消える, すたれる, 公表(放送)される

(文)・(検)とも “W”・「ラ」にそれぞれほぼ同義の記述があることがわかる。

- ⑩ to give off : (文) 止メル, 禁スル/(検) (熱・臭いなどを)発する

“W” to cease ; to forbear

「ラ」(煙・臭いなど)を発する, 出す

(文)と “W” (検)と「ラ」がそれぞれ一致することから, 当時は(文)の意味で用いられていたが, 現在では(検)の意味に取って代わられていると推察できる。

- ⑪ to go through : (文) 仕遂ゲル, 終ル/(検) 経験する

“W” to pass in a substance

「ラ」～を通り抜ける, ～を経験する

(文)の, 物事をやり遂げる・終わるという意が派生して(検)の“経験する”という訳語になった, と考えることができそうである。

(8) “H” (9) “I”

(10) “J” (11) “K”

以上4項目についてはいずれの重複掲載語もほぼ同じ意味の訳語が与えられていた。

(12) “L”

- ② to look up : (文) 見上ゲル/(検) 辞書を引く, 調べる

“W” to look up a thing, is to search for it and find it

「ラ」(自) 見上げる/(他) ~を調べる, 引く

「ラ」より, (文) では自動詞としての訳語を, (検) では他動詞としての訳語を掲載していることが観察される。

- ④ to leave out : (文) 廃スル, 忘レル/(検) ~を省く

“W” to omit

「ラ」~を外に出した(残した)ままにしておく, (人・物)を抜かす, 除外する, (言葉など)を省く

表現は異なるが, 「ラ」には(検)の訳語, (文)と類似する訳語とも掲載されている。

(13) “M”

- ① to make no difference : (文) 事トモセス, 意ヲ留メス

(検) 同じことである

“W” 掲載なし

「ラ」掲載なし

“W”・「ラ」ともにこの熟語の掲載はないが, “(物事の差異を)事トモセス, 意ヲ留メス” と解釈すれば(検)と同義であると考えられる。

- ③ to make believe : (文) …カト思フ/(検) ~のふりをする

“W” 掲載なし

「ラ」~ごっこをする, ~のふりをする, みせかける

(検)・「ラ」と(文)の間には動作主の差異が認められる。受動態で用いられたのであれば(文)の訳語があてはまるが, 当時は能動態でもこのような意味で用いられていたのであろうか。この点についてもさらなる調査が必要であろう。

当初の調査では, 「英文熟語集」と英検用熟語集に重複して掲載されていた

熟語数は56で、そのうち27が一見異義掲載語であると思われた。しかし、以上の検証の結果から、『英文熟語集』及び英検用各熟語集に重複する異義掲載語のうち、『英文熟語集』において完全に現代語とは異なる訳語があたえられていたのはわずか8語(“B”-②④, “C”-②③④, “G”-⑥⑦⑩)であることがわかる。

つまり、共通掲載語の約85%以上が、表現こそ違え、ほぼ同義といえる訳語を与えられていたといえる。すなわち、『英文熟語集』の訳語は現代においても十分通用する、と言えよう。

5. おわりに

今回の調査は、調査範囲を拡げたとはいえ全項目について調査を行ったわけではない。本稿はその点においてまだまだ未完成である。しかし、日本で英学研究が始まって日も浅い当時、130余年の歳月を経てなお活用され得る辞書が編纂されたことは驚嘆に値する。確たる結論を述べることができないのは残念であるが、日本英学のさきがけとなった人々とその歴史に関する知識を得られたのは大きな喜びである。

(注)

(注1) 『英文熟語集』

小幡篤次郎及び甚三郎兄弟により編纂され、1868年(慶応4年)尚古堂より出版された。熟語総数は2200で、編者は慶応義塾の出身者である。

(注2) IC Dictionary

セイコー電子株式会社製の電子辞書。内容は「新英和中辞典(第5版)」(1993, 研究社)及び「新和英中辞典(第3版)」(1993, 研究社)に基づき編集されている。

(注3) 『英文熟語集』の掲載は“to come home”, 英検用熟語集の掲載は“come home to”となっており、前置詞toの有無の差異があるが、訳語がほぼ同義であることから同一の熟語として扱う。

(注4) 『英文熟語集』には“to enjoy one's self”, 英検用熟語集には“enjoy one-self”と記載されているが、差異はないものとみなし、同一の熟語として扱う。

(注5) “to flar up”と掲載されているが、これは熟語の意味から考えても“flare”

の誤りであると考えられる。この点については、竹中にも指摘されている。

参考文献

- 岩堀 行宏, 1995.「英和・和英辞典の誕生ー日欧文化交流史ー」, ビブリオフィル叢書
永嶋 大典, 1970.「蘭和・英和辞書発達史」, 講談社
Webster, N. 1891. "An American Dictionary of the English Language", Donohue
& Henneberry Publishers
重久 篤太郎, 1941.「日本近世英学史」, 教育国書株式会社
惣郷 正明, 1977.「サムライと横文字」, ブリタニカ出版
惣郷 正明, 昭和53年.「辞書漫歩」, 朝日新聞社
惣郷 正明, 1983.「英語学び事始め」, 朝日イブニングニュース社
惣郷 正明, 1990.「日本英学のあけぼの」, 創拓社
高梨 健吉, 1985.「英語の先生, 昔と今ーその情熱の先駆者たち」, 日本図書ライブ
竹中 龍範, 「『英文熟語集』解題」
竹林 滋・小島 義郎・東 信行 編, 1995.「カレッジライトハウス英和辞典」初版 第1
刷, 研究社
中村 彰伸, 1996.「英検 2 級に出る英熟語400」, 中経出版
日本英学史学会 編, 1976.「英語事始」, ブリタニカ出版
宮野 智靖, 1996.「英検 1 級に必ず出る英単語922と英熟語597」, こう書房
吉成 雄一郎, 1995.「英検 3 級 語彙・イディオム完全対策」, アルク